

人々は狂いつつある——心の病気とは何か？

健全とはどういうことか？

Greatchain

2020/10/04

アメリカ、あるいは欧米全般が狂っているのは否定しようがない。では、多少ともそれを反映するわが国はどうか？ わが国が健全な状態にあると言う人はいないだろう。特に、人の命をどう考えるかについて、国民全体に定見がないと言ってよい。自殺や凶悪犯の多発も、家庭崩壊も、ペドフィリアの明らかな増加も、なぜそんなことが起こるのか、どう考えてよいかわからない。特にそれが、過激リベラル思想の影響を疑わせて、放置できないところまで来ても、政府も、我々一般国民も、どうすることもできないでいる。

「人間の尊厳」とか「生命への畏敬」といった概念には、誰でも納得し、敬意を払っているだろう。しかし残念なことに、わが国には、唯物論科学という、それを妨げる信念が、大きな文化として存在していて、宇宙解釈や人間解釈には、あるきまった考え方しかありえないと考え、教育している。個人的レベルでは、そうではないと思いたい、公的には、それが絶対の禁忌のように、すなわち、それに違反すれば、処罰を受けるものとして存在する。疑う人は、公共放送のアナウンサーが、うっかり、あるいは実験的に、「神」とか「創造者」という言葉を、使ったと想像してみるがよい。その結果は目に見えている。彼/彼女は、職にとどまることはできないだろう。「神」は、わいせつな言葉と同じく、絶対のタブーになっている。

「霊」とか「魂」についても同じである。そういうケツタイなものは、文明国には存在しないことになっている。もし人間が、唯物論（ダーウィン進化論）的にしか人間を解釈できなければ、人間蔑視の思想は、当然のことになるだろう。「人間なんて下等動物から発生したものだ。」——なるほど——では、それはよいとしよう。しかし問題は、これを純粋に生物学の問題であるかのように喧伝しながら、ひそかに人間から魂を奪うことである。我々は、サルが人間に進化しようが、人間とサルが同類であろうが、実はどうでもよいことである。どうでもよくないのは、「人間とは何か」「生きるとはどういうことか」という問いを、問うに値しないものにするのである。そして、この人間蔑視哲学が、自殺願望の人々の意思決定や、ペドフィリア容認と、軽々しくつながることである。

この問題に悩む人々がいて、宗教に解決を求めようとしても、我々の文化がこれを笑い飛ばすだろう。そして、宗教は何の解答も与えないどころか、人々に害を与えるものだ、と言うだろう。そのように言う人々は、その宗教観自体が間違っているか、間違った宗教の実例しか知らないか、どちらかである。宗教？　なんてカッコ悪イ！——。しかし、人間の起源についての唯物論的解釈が、完全に**時代遅れ**であることを、彼らは知らないでいる。あるいは知っていても、諸々の打算が働いて、その事実を無視している。

打算の理由はいろいろある。中でも特記すべきは、国連の機関 WHO が、人間の健康の定義を「身体と心（マインド）の健康」に限定し、スピリチュアルな「健全」の概念——「神聖」「宇宙的な有機的全体」や「癒し」の側面——を無視することである。これが意図的なものであるのは明らかで、それは、現在のアメリカの分裂によって露呈した。国連は明らかに、反トランプ、親過激リベラル・「深層国家」・New World Order 支持の立場を取っている。

これについては、Holism の立場（簡単に言えば東洋医学の立場）を取る医師たちが、次々と暗殺されたことがあった事実からも推測できる。いったい、この世界にどういう「悪」が働いているのだろうか？ <http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170527.pdf> **最も平和的で、最も利益の追求から遠く、最も人々を本質的に「癒す」はずの医学（医療）が、なぜ最も不都合な者として迫害されねばならないのか？** その答えが今、最も露骨に、反トランプ包囲網として——トランプ側からは「泥沼掃除」の強い意志として、現れている。

我々は現在、ただ生きているのではない。意識的・無意識的な霊的レベルで、アメリカも世界全体も巻き込む大きな「悪」と戦いながら生きている。

これについて最も注目すべきものは、ほぼ 20 年前から、ダーウィン進化論の迷妄を批判するものとして始まった、Intelligent Design 運動である。創造者の存在を、通常の科学の仮説として証明できるとする、この「神仮説」は、世界中の人々の待望の理論として、一気に受け入れられるだろうと思われた。

ところが 20 年を経て、いま起こっていることは、その考え方が時代とともに、ますます強化され、圧倒的に信頼を得ていく一方で、これをあくまで認めようとしないう、旧唯物論科学体制との、馬鹿々々しくも思いがけない分裂だった。体制派が主張するのは、科学的検証ではない。それは、「そんなものは仮説としても認められない」という独断論であり、それがあたかも切支丹弾圧のように、わが国のすべての主流メディアを支配している。それが健全な科学でも、社会一般のあり方でもないことは、言うまでもない。普通の感覚を持った人なら、そこに不気味で恐ろしい何かがある、と直感するだろう。

「インテリジェント・デザイン」の研究所 Discovery Institute では、膨大な出版物だけでなく、頻繁に更新される電子版記事を、次々と発表している。

およその参考のために、きょうの日付で発表されている、数篇の論文の見出しと、その一つの要約記事を見本に掲載することにする (Evolution News, Oct. 15, 2020)。解説すべき要点はいくつかあるが、それは今のところ、煩雑なので省略することにする：——

ダーウィニストの ‘キャンセル文化’ にもかかわらず、インテリジェント・デザインが、生物ジャーナルの難関を突破する——この論文は査読を通過し、同ジャーナルのトップ編集者の公然たる悪意にもかかわらず、出版を認められた。

新しい研究が、分子機械は (マイケル) ビーヒーの理解したより、もっと驚くべきものであることを発見

なぜ “無” より “何ものか” なのか？ オックスフォードの John Lennox が、「潮流に逆らう」

(ギエルモ) ゴンザレスが『特権的惑星』の議論を拡大化

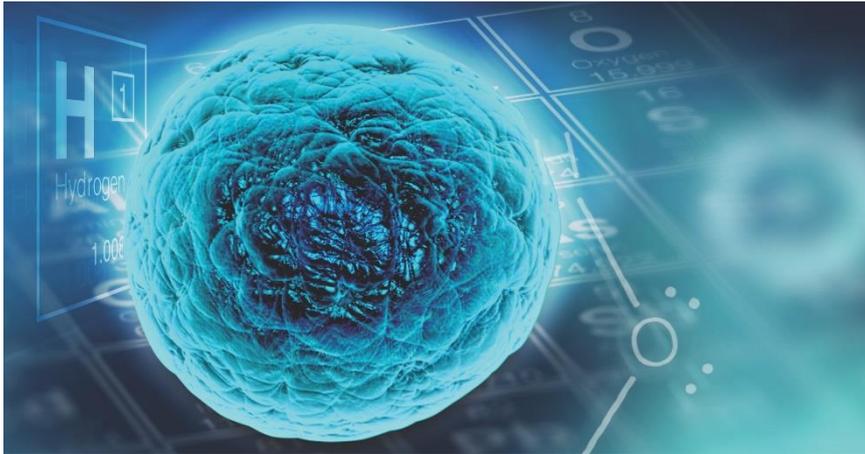
‘科学業者ギルド’ のマスクが落ちかかっている

人間進化にとっては落胆の 10 年間だった

(マイケル) デントンが「第 3 の無限」を探究——細胞の多様性、その形、機能、移動のそれは、説明を超えており、ある細胞はほとんど感覚や知能をもっている。

デントンが微調整 fine-tuning の議論を、全く新しいレベルに取り入れる

David Klinghoffer
September 28, 2020



生物学者 Michael Denton の新著 *The Miracle of the Cell* 『細胞の奇跡』が、きょう出版される。古生物学者ギュンター・ベックリーが説明するように、自然界には、いくつものレベルの微調整が存在する——宇宙的、惑星的、生物学的な微調整である。しかしデントンは、この現象の議論と、それが意味するものを、「全く新しいレベル」で取り入れている。

Gunter Bechly からの引用：——「この新しい啓発的な本で、すぐれた生物学者マイケル・デントンは、ファイン・チューニングの議論を、全く新しいレベルで取り込んだ。彼が示すのは、化学元素そのものと、その特性の多くが、生命のために微妙に微調整されていること、またその同じことが、水のような絶妙な化合物にも当てはまることである。デントンはまた、微調整のこれらの例のすべてが、最初の生きた細胞が出現する前に存在した「原初の青写真」に向って収斂しているという、説得力ある主張をしている。デントンは、この事実を集積して、自然界の目的論の証拠を導き出す、先頭に立っている。『細胞の奇跡』は、自然科学におけるインテリジェントな原因を、強く主張する立場に立っている。現代科学からの増大する証拠の集積は、支配的な、しかし時代遅れの唯物論パラダイムから、移行すべきことを、ますます要求している。それはこれまで、自然法則と単なる物的運動の、盲目的な作用だけを許容してきた。マイケル・デントンの仕事は、この進行中の科学革命の、画期的な一里塚となるであろう。」

このギュンター・ベックリーの文章は、非常にわかり易く、かつ重い意味をもつものである。これが「神仮説」 God-hypothesis に繋がるものだからといって、この心躍るような事実を、青少年や若い研究者から、必死に遠ざけようとする人々がいるのだろうか？ **大声をあげて聞いてみたい。**